PATENT ABSTRACTS OF JAPAN

(11)Publication number:

(43)Date of publication of application: 30.01.1980

(51)Int.CI.

B01J 19/06 // CO9K 3/00

C10L 7/00

(21)Application number : 53-085403

(71)Applicant: AJINOMOTO CO INC

(22)Date of filing:

13.07.1978

(72)Inventor: TAKAHASHI TOSHIO

HONMA MASAO

KAWAKADO KAZUTOYO

KIYOOKA BUNJI

(54) SOLIDIFYING AGENT FOR ORGANIC MEDIUM

(57)Abstract:

PURPOSE: To manufacture a solidifying agent for organics which is capable of solidifying organics at ordinary temperatures from a combination of 12-hydroxystearic acid and an organic solvent to dissolve it.

CONSTITUTION: A combination of 12-hydroxystearic acid and an organic solvent capable of dissolving 20 to 70 wt% the 12-hydroxystearic acid at 50° C is prepared. The organic solvent used is falled into bad solvent, e.g., polyhydric alcohols, ethers, etc., and good solvent, e.g., lower fatty acids, liquid amides, etc., roughly according to the solubility of 12-hydroxystearic acid, and then are used either soly or in combination. The organic solvent and 12-hydroxystearic acid are mixed at 30 to 60° C to dissolve 12-hidroxystearic aicd, and then cooled to obtain a solid or semisolid compound. The compound is used as a solidifying agent for such organics as heavy oil, light oil, etc., in order to prevent the dispersion of spillage oil, etc., to wider range and thereby to recover them.

LEGAL STATUS

[Date of request for examination]

[Date of sending the examiner's decision of rejection]

[Kind of final disposal of application other than the examiner's decision of rejection or application converted registration]

[Date of final disposal for application]

[Patent number]

[Date of registration]

[Number of appeal against examiner's decision of rejection]

[Date of requesting appeal against examiner's decision of rejection]

[Date of extinction of right]

Copyright (C); 1998,2003 Japan Patent Office

⑩ 日本国特許庁(JP)

⑪特許出願公告

報(B2) 公

昭60-44968

@Int_Cl_4	識別記号	庁内整理番号	200公告	昭和60年(19	85)10月7日
B 01 J 19/06 C 09 K 3/00 C 10 L 7/00		6542-4G 6683-4H 7229-4H		発明の数 1	(全4頁)

有機媒体の固形化剤組成物 ❷発明の名称

> 创特 願 昭53-85403 砂公 開 昭55-13119 **22**出 願 昭53(1978)7月13日 ❷昭55(1980)1月30日

の発 明 敏 男 川崎市川崎区観音2-20-8 者 高 楯 明 者 砂発 本 間 正 男 横浜市金沢区金沢町184-20 明 勿発 者 Ш 角 和 粤 川崎市幸区小倉811 明 個発 者 清 岡 文 治 川崎市川崎区観音2-20-8 味の素株式会社 願 人 東京都中央区京橋一丁目5番8号 ②出

平 審 査 官 服 部

1

切特許請求の範囲

1 (a)12-ヒドロキシステアリン酸と(b)12-ヒド ロキシステアリン酸を50℃で20~70重量%溶解し 得る単一又は混合有機溶媒とよりなる組成物で、 該組成物を均一な溶液となる迄加温したる後に、5 これを常温に冷却したときに固形又は半固形状物 を形成するに足る量の12-ヒドロキシステアリン 酸が存在することを特徴とする有機媒体の固形化 剤組成物。

発明の詳細な説明

本発明は12-ヒドロキシステアリン酸を閻形化 剤成分として含有する有機媒体の固形化剤組成物 に関する。

常温で液状を呈する有機媒体を固形化させるこ に富むため、これを含有する容器が破損もしくは 転倒したとき、広範囲に流出、拡散し、その回収 が極めて困難である。流出した有機媒体が可燃性 媒体、例えば燃料油である場合には自然発火によ る火災の発生も挙げられる。もし有機媒体が固形 20 ができない。 化されていれば、有機媒体の流出のおそれはな く、又、燃料油の流出に伴なう火災の発生を防ぐ ことができる。更に又、有機媒体の固形化処理技 術は特に海上、水上、陸上、施設内等で誤って流 出させた油類の有機媒体を固形化し、以て拡散を 25 防ぐと共に回収を容易にならしめるのに有効に適 用される。又、一般家庭等により排出される使用

済の天ぷら油のような品質劣化した食用油、不純 な燃料油等の廃油を固形化して取扱い、回収を容 易にならしめる目的に対しても適用することがで きる。

2

従来、12-ヒドロキシステアリン酸が有機媒体 を固形化し得る能力を有することが知られている が、該化合物を用いて有機媒体に添加し、加熱に より溶解した後冷却固化させる方法が提案されて いる (Bull. Chem. Soc. Japan., 42, 3422 10(1969))。しかし、この公知方法では固形化すべ き有機媒体全体をかなり高温に加熱する必要があ り、更に高温になつた溶液が冷却固化するのに時 間がかかり、場合によつては加熱装置ばかりでな く、冷却装置をも必要とする等、加熱時の安全対 とがしばしば望まれる。かかる有機媒体は流動性 15 策、操作上の観点から実用的な方法とは言えな い。特に大量の有機媒体を固形化して貯蔵する場 合や廃油、海上等に流出した油類を固形化処理す る場合のように固形化すべき有機媒体を加熱する ことが不都合な応用分野に対しては適用すること

> 本発明の目的は固形化すべき有機媒体を何ら加 熱することなく、均一で強固な固形化物を与える のに好適な12-ヒドロキシステアリン酸含有固形 化剤組成物を提供することにある。

> 本発明者は12-ヒドロキシステアリン酸の有機 溶剤に対する溶解性が温度に大きく依存し、加温 下に12-ヒドロキシステアリン酸の高濃度溶液を

調整し、これを固形化すべき有機媒体に添加混合 して固形化させる方法を採用すれば、固形化すべ き有機媒体を加熱することなく、短時間にしかも 特別な装置を必要とせずに固形化させることがで きることに着目した。

この方法を適用する際、最も重要なことは溶剤 の選択であり、比較的低温(例えば30~60℃)で 高濃度の12-ヒドロキシステアリン酸溶液を調製 し得ること、そして添加した溶剤が固形化を阻害 ることが必須である。本発明者はかかる要件を満 たす溶剤について種々検索した結果、12-ヒドロ キシステアリン酸を50°Cで20~70重量%溶解し得 る有機溶剤が好適で、該有機溶剤中12-ヒドロキ 却して得られる固形又は半固形状の組成物は比較 的低温(例えば30~60℃)で再溶解可能であり、 これを加温して溶液状となし固形化すべき有機溶 剤に適量添加混合したときは均一で硬い固形化物 つた。

即ち、本発明は(a)12-ヒドロキシステアリン酸 と(b)12-ヒドロキシステアリン酸を50°Cで20~70 重量%溶解し得る単一又は混合有機溶剤とよりな したる後に、これを常温に冷却したときに固形又 は半固形状物を形成するに足る量の12-ヒドロキ システアリン酸が存在することを特徴とする有機 媒体の固形化剤組成物である。

本発明の固形化剤組成物を用いて常温で液状を 30 とができる。 呈する有機媒体を固形化する際には、固形化すべ き有機媒体を全く加熱することなく、これに固形 化剤組成物を加温して溶液状となした後添加混合 することで行われる。本発明の固形化剤組成物は して固形又は半固形状物に変換しておけば、使用 するまでの保管等も液体に比して容易であるとい う利点を有する。

本発明の固形化剤組成物を調製するのに使用さ 20~70重量%溶解し得るものであればよいが、こ れを更に常温に於ける12-ヒドロキシステアリン 酸に対する溶解性から分けると常温にて10重量% 以下溶解し得る貧溶剤と10~60重量%溶解し得る

良容剤の2種類に大別することができる。前者の 貧溶剤としては炭素数 4 以上の一価アルコール (例えば n ーブタノール、イソプタノール、tert ーブタノール、nーペンタノール、nーヘキサノ 5 ール、nーオクタノール、2ーエチルへキサノー ル、オレイルアルコール等)、多価アルコール (例えばプロピレングリコール、1, 3ープタン ジオール、1,4ーブタンジオール等)、セロソ ルブ類(例えばメチルセロソルブ、エチルセロソ せず均一で強固な固形化物を与える溶剤を使用す 10 ルブ、イソプロピルセロソルブ、ブチルセロソル ブ等)、エーテル類(例えばジオキサン、グリコ ールモノメチルエーテル、ジエチレングリコール モノエチルエーテル、エチレングリコールジエチ ルエーテル等)、ケトン類(例えばアセトン、メー システアリン酸を高濃度に加温溶解し、次いで冷 15 チルイソブチルケトン等)、炭水水素類 (例え ば、ヘキサン、ベンゼン、トルエン、灯油、ホロ ン等)、ハロゲン化脂肪酸炭化水素類(例えばク ロロホルム、四塩化炭素等)、炭素数4以上の脂 肪酸(例えば酪酸、オレイン酸等)有機酸又は脂 が形成することを見出し、本発明を完成するに至 20 肪酸のエステル(例えば酢酸エチル、オルト蟻酸 エチル等)、フタル酸エステル、リン酸トリメチ ル、リン酸トリクレシル又はこれら2種以上の混 合溶媒等を例示することができる。又、後者の良 溶剤としては炭素数3以下の低級アルコール (例 る組成物で、該組成物を均一な溶液となる迄加温 25 えば、メタノール、エタノール、プロパノール 等)、低級脂肪酸(例えば酢酸、プロピオン酸)、 液状アミド類(例えば、ホルムアミド、ジメチル ホルムアミド、N-メチルピロリドン等)、リン 酸トリエチル、リン酸トリブチル等を例示するこ

尚、12-ヒドロキシステアリン酸を50℃で20重 量%未満の溶解度しか示さない有機溶剤(例えば グリセリン、ジアセチン、ポリエチレングリコー ル、アセトニトリル等)と12ーヒドロキシステア 必要に応じてこれを一旦加温して溶液状とし冷却 35 リン酸からなる固形化剤組成物を溶液状態で有機 媒体に配合した場合には不均一な部分固形化物し か与えない。しかし、このように単独では不適当 な貧溶剤を上記したような低級アルコール等の良 溶液と混合して50℃で12-ヒドロキシステアリン れる溶剤は12-ヒドロキシステアリン酸を50℃で 40 酸を20~70重量%溶解し得るような混合溶媒とな すことにより同様に使用することができる。

> 本発明の固形化剤組成物を占める12-ヒドロキ システアリン酸の配合割合は該固形化剤組成物が 30~60℃の比較的低温で均一溶液を与え、これを

1. 主席 性主管性病院等數据院院的中央企业等等等。一个人,这些规定的。一种对于企业大学等等等。

常温に冷却した後固形又は半固形状物を与える分 量即ち、常温での溶解度を超える量であれば特に 限定されない。これは使用した溶剤の種類によっ て異なるが、実験的に容易に設定することができ との組合せに於ては12-ヒドロキシステアリン酸 の配合割合が10~50重量%が好ましく、又、良溶 剤との組合せに於ては20~70重量%の範囲が好ま しい。又、良溶剤と貧溶剤との混合溶剤を固形化 剤の溶剤として使用するときは、両者の混合割合 10 上、好ましくは1~5重量%程度になるように添 を変えることにより固形化時間を任意に調節する ことができる。

本発明によつて固形化し得る有機媒体としては 12-ヒドロキシステアリン酸と混合し加熱溶解後 冷却したときに固形化されるものであればいかな 15 るものでよく、例えば重油、軽油、灯油、ガソリ ン等の鉱油類、ミシン油、スピンドル油、タービ ン油等の機械油、大豆油、ナタネ油、鯨油等の動 植物油類、固形化剤組成物に於ける貧溶剤が好ま しく挙げることができる。

固形化剤の溶剤は固形化すべき有機媒体もその まま溶剤として用いてもよく、これと相溶性を有 するもののうちから適宜選択される。例えば、海 上、水上、陸上、施設内等で流出した油に適用す

る場合には流出した油と同一の油を固形化剤の溶 剤として使用するときは回収後の油を再生するの に容易であり、又、品質劣化した天ぷら油等の廃 食用油を固形化処理し、これを石鹼に変えて再利 る。通常、上記した2種類の溶剤のうち、貧溶剤 5 用するときは溶剤として液体脂肪酸を使用するの が好ましい。

> 本発明の固形化剤組成物を例えば50°Cに加温し て溶液状となし、固形化すべき有機媒体に12-ヒ ドロキシステアリン酸換算として0.5重量%以 加混合すれば、短時間で強度308/㎡以上の均一 な固形化物が得られる。

以下、実施例により具体的に説明する。 実施例 1

12-ヒドロキシステアリン酸を下表に示した溶 剤に10~40重量%の割合になるように添加し、こ れを加熱溶解させた後冷却して固形化剤組成物を 調整した。次いでこれを50°Cにて加温溶液状とな し、同表に示した被固形化有機媒体50gに12-ヒ 20 ドロキシステアリン酸として0.5~2 重量%にな るように添加混合したところ、均一な固形化物が 生成した。このものの強度を25℃レオメーターに よつて測定した結果も併せて同表に示した。

固 形 化 剤 組		12-HS	固形化	能力
溶 剤	12-HS濃度	添 加 量	被固形化有機媒体	強 度
1 -オタタノール	20 w t%	2 w t %	白 灯 油	1 2 5 g /cml
イソプロピルセロソルブ	#	"	n	1.0.5
プロピレングリコール	H	a a	ジオクチルフタレート	187
アセトン	u	Ħ	トルエン	6 0
オレイン酸メチル	"	"	白 灯 油	180
四塩化炭素	<i>II</i>	"	スピンドル油	130
ベンゼン	. 4	#	流動パラフイン	190
オレイン酸	ď	77	大 豆 油	250
#	a	I	#	105
"	σ	0.5	Ø	5 3
"	3 0	2	g	256
"	10	n	ø	235
ダーク油(混合脂肪酸)	2 0	. "	n	240
トリプチルホスフエート	3 0	<i>n</i> .	· #	.90
メタノール	q	"	ジオクチルフタレート	70
ジメチルホルムアシド	4 0	"	スピンドル油	8 9

注) 12-HS:12-ヒドロキシステアリン酸

7

実施例 2

家庭より排出された使用済天ぶら油500gに12 ーヒドロキシステアリン酸20重量%及びオレイン 酸80重量%から成る組成物を45℃にて加温溶解させて得た溶液50gを添加混合したところ、5分後 5 には硬い固形化物(強度205g/๘)が生成した。

実施例 3

12-ヒドロキシステアリン酸20重量%及びジェチレングリコールジェチルエーテルとジメチルホ 10 ルムアミド (DMF) の下表に示した割合の混合溶剤80重量%からなる組成物を45℃にて溶解させ、その3 mlを白灯油30mlに添加、混合して固形化に至る時間を測定した結果を下表に示した。

混合搭剤割合(v/v) ジエチレングリコール ジエチルエーテル	固形化時間		
10:0	<10秒		
9:1	40秒		
8 : 2	1分10秒		
7:3	5 分		
6 : 4	30分		
5 : 5	12時間		

8

- 48 -